

国語科

生徒はどのような漢字の読み書きが習得できないか

—中学「漢字コンクール」の設問別分析—

寺 井 一

【抄録】 筆者の担当学年の中学三年修了時に「漢字コンクール」を実施した。本稿は、そこで出題した全100問について設問別に集計し、正解率や無解答率を算出することなどを通して、生徒がどのような漢字の読み書きを苦手とするのか、どのような要因が読み書きの習得を妨げているかを、「読み」と「書き」に分けて分析・考察する。更にその考察をもとに、漢字指導の方法や国語科における言語事項の指導についての具体的な提言を述べる。

【キーワード】 正解率、無解答率、生徒の語彙、訓読みの漢字、言語教育

0. はじめに

漢字の読み書きは、国語科の指導事項では最重要のものであり、かつ生徒にも身近なものである。しかしながら、その指導については、系統立て、統一された方法がある訳でなく、各教員の扱いに委ねられている部分が多い。本稿は、中学三年の学年末に行った「漢字コンクール」の実践をもとに、生徒は、どのような漢字が、なぜ読み書きできないか、どのような指導法が考えられるか、について分析し、論じることを目的とする。

1. 「漢字コンクール」の方法

1-1. 対象生徒の構成

名古屋大学教育学部附属中学校は中高六年一貫の学校であり、附属小学校は存在しない。各学年2クラス（1クラスは40名）、男女比率は1対1である。屢々入試制度の改革が行われているが、多様な生徒を入学させることを目的とし、所謂エリート校化することを一貫して拒否している。従って、一般的な公立中学に似た性格も併せ持つ学校である。但し、中学入試があるため、極度に学力の低い生徒はいない。非常に能力の高い生徒から、やや劣った生徒まで分布している。

「漢字コンクール」は学校行事ではなく、筆者の担当する学年で行い、ある範囲を設定して、漢字の読み書きをテストするものである。ここで直接対象となったのは、平成9年度の中学三年生であり、筆者は、教科担当・学年担当として、偶々中学一年から三年間持ち上がった（注1）。生徒数は、A組B組合わせて79名であるが、欠席があったため、「漢字コンクール」の受験者は計74名（男子37名、女子37名）

であった。

1-2. 「漢字コンクール」実施の経緯

実施の目的は凡そ次の三つである。

- ① 履習した漢字の復習をさせる
- ② 漢字学習の動機付けと学習時間の確保をさせる
- ③ 各自の読み書き能力の把握をさせる

国語の授業内では到底十分な漢字学習は行えない。また、教科書だけの学習では不足する。これは多くの国語教師の実感するところであろう。そのため、止むを得ず、副教材を選定し、生徒の自宅学習に期待するという方法をとることとなる。そこで、学校では年1回の「漢字コンクール」を実施して、生徒の漢字学習の動機付けを図ったのである。

本校の使用テキストは、吉野教育図書刊「漢字書き取り練習帳」である。全体が「一級」から「九級」の9段階に分かれ、級が上がるに従って難度が増す。「一級」から「六級」までは、小学校の学年別配当漢字の学年と級が対応している（注2）。「七級」から「九級」までは、常用漢字から学年別配当漢字を除いたものが、編集者の難易度の判断に従って三等分して配置されている。各章は、漢字の解説と短文による書き取りの問題から成る。

「漢字コンクール」は中一から行った。テキストから範囲を指定し、自宅学習をさせた上で試験を行うものであり、優秀者は表彰した。出題範囲は、中一（9月実施）が「一級」から「六級」の読み書き、中二（9月実施）が「一級」から「七級」の読み書き、今回分析する中三（3月実施）は「一級」から「九級」までの読み書きである。

中三 漢字コンクール 問題 (四十分)

'98. 3. 19

各傍線部の書き取り、或いは読み取りをなせ。漢字を書く場合は、一画一画丁寧に楷書で書くこと。各一点×百問。

レベル1 四十問。六級(教育漢字八小学校配当)までの書きとり。

- | | | |
|---|--|--|
| 1. 反対の <u>ホウガク</u> に行く。 | 2. 田畑を <u>タガヤス</u> 。 | 3. 新聞の <u>コウコク</u> を読む。 |
| 4. タニソコ(タニソコ)を流れる川。 | 5. <u>ゼツタイゼツメイ</u> の立場。 | 6. <u>ケカ</u> の手術。 |
| 7. 会社の <u>ソシキ</u> を動かす。 | 8. <u>思わずヒメイ</u> をあげる。 | 9. <u>からだをソラス</u> 。 |
| 10. 真理を <u>ツイキユウ</u> する。 | 11. <u>クナン</u> に満ちた一生。 | 12. <u>ダイサンシヤ</u> の意見を聞く。 |
| 13. 牛乳の <u>ハイタク</u> をする。 | 14. <u>ガス</u> の <u>おいがハナ</u> につく。 | 15. <u>欠点</u> を <u>ツツミ</u> かくす。 |
| 16. <u>人々のシンヨウ</u> を得る。 | 17. <u>イチヨウ薬</u> を飲む。 | 18. <u>セイト</u> 会の役員。 |
| 19. <u>知事選挙</u> の <u>トウヒヨウ日</u> 。 | 20. <u>サイガイ</u> は忘れた <u>ころ</u> に来る。 | 21. <u>ごみ</u> を <u>完全</u> に <u>ネンシヨウ</u> 。 |
| 22. <u>タインヨウ</u> チキな生き方。 | 23. <u>絵画</u> には <u>カンシン</u> がない。 | 24. <u>仕事</u> を <u>マカ</u> せる。 |
| 25. <u>雑草</u> を取り <u>ソゾク</u> 。 | 26. <u>湖水</u> の <u>深さ</u> を <u>ハカ</u> る。 | 27. <u>雲行き</u> が <u>ケンアク</u> になる。 |
| 28. <u>人々</u> を <u>インソツ</u> する。 | 29. <u>かし切り</u> バス。 | 30. <u>悪い</u> タイドをとる。 |
| 31. <u>学業</u> セイセイが <u>向上</u> する。 | 32. <u>あやまち</u> を <u>素直</u> に <u>アヤマ</u> る。 | 33. <u>相手</u> の <u>考え</u> を <u>ヒハン</u> する。 |
| 34. <u>ゆで</u> タマゴを <u>食べる</u> 。 | 35. <u>ろうか</u> の <u>そうじ</u> を <u>スませ</u> る。 | 36. <u>年長者</u> を <u>ウヤマ</u> う。 |
| 37. <u>欠員</u> を <u>ホシユウ</u> する。 | 38. <u>ピアノ</u> を <u>ブンカツ</u> 払いで <u>買</u> う。 | 39. <u>ウラ</u> の <u>うら</u> まで <u>考</u> える。 |
| 40. <u>チソウ</u> の <u>変化</u> を <u>調</u> べる。 | | |

レベル2 三十問。九級まで(常用漢字)の読み。

- | | | |
|--------------------------------|---|--|
| 1. 軽はずみな行動を <u>戒</u> める。 | 2. <u>ケガ</u> の <u>手当</u> を <u>施</u> す。 | 3. <u>柔和</u> な顔。 |
| 4. <u>代替案</u> を出す。 | 5. <u>滑</u> らかな <u>氷</u> の <u>表面</u> 。 | 6. <u>瞬</u> くの間の <u>出来事</u> 。 |
| 7. <u>官吏</u> として <u>採用</u> 。 | 8. <u>交通</u> を <u>妨</u> げる。 | 9. <u>稚拙</u> な <u>技</u> を描いた <u>絵</u> 。 |
| 10. <u>社会</u> に <u>貢獻</u> する。 | 11. <u>交渉</u> が <u>成立</u> する。 | 12. <u>穏</u> やかな <u>会話</u> をする。 |
| 13. <u>部外者</u> を <u>排斥</u> する。 | 14. <u>誘拐</u> の <u>容疑</u> 。 | 15. <u>容赦</u> なく <u>切り捨</u> てる。 |
| 16. <u>価格</u> を <u>据え置</u> く。 | 17. <u>落下</u> 傘が <u>開</u> く。 | 18. <u>普遍的</u> な <u>考</u> え。 |
| 19. <u>国王</u> に <u>謁見</u> する。 | 20. <u>裁判官</u> の <u>罷免</u> 。 | 21. <u>威嚇</u> する <u>ため</u> に <u>射撃</u> する。 |
| 22. <u>マッチ</u> を <u>擦</u> る。 | 23. <u>濫伐</u> により <u>森林</u> が <u>なくな</u> る。 | 24. <u>耐久力</u> を <u>培</u> う <u>運</u> 動。 |
| 25. <u>不朽</u> の <u>名</u> 作。 | 26. <u>健</u> やかに <u>育</u> つ。 | 27. <u>気</u> が <u>利</u> く。 |
| 28. <u>池</u> が <u>干</u> 上がる。 | 29. <u>併</u> せて <u>用</u> いる。 | 30. <u>事故</u> で <u>殉職</u> する。 |
- (レベル3～5はウラに有り。)

レベル3 「七級」の書き取り十問。

- | | | |
|--|---|---------------------------------|
| 1. <u>仕事</u> が <u>イソガ</u> しい。 | 2. <u>口</u> に <u>水</u> を <u>フク</u> む。 | 3. <u>新入部員</u> の <u>カンガイ</u> 会。 |
| 4. <u>コドク</u> な <u>生</u> 活。 | 5. <u>石油</u> を <u>サイクツ</u> する。 | 6. <u>なかなか</u> ネム <u>れ</u> ない。 |
| 7. <u>ナヤ</u> む <u>こと</u> が <u>多</u> い。 | 8. <u>読書</u> で <u>ヨカ</u> を <u>過</u> こす。 | 9. <u>国民</u> の <u>シヨウ</u> チヨウ。 |
| 10. <u>物陰</u> に <u>ヒソ</u> む。 | | |

レベル4 「八級」の書き取り十問。

- | | | |
|---|--|--------------------------------|
| 1. <u>安易</u> に <u>ダキヨウ</u> する。 | 2. <u>利用者</u> の <u>ベンギ</u> を <u>図</u> る。 | 3. <u>必死</u> に <u>テイコウ</u> する。 |
| 4. <u>個人</u> の <u>権利</u> を <u>オカ</u> す。 | 5. <u>苦しい</u> 状況に <u>オチ</u> いる。 | 6. <u>ナンジャク</u> な <u>土</u> 。 |
| 7. <u>空気</u> の <u>ジュンカン</u> が <u>悪</u> い。 | 8. <u>折り</u> タタ <u>み</u> の <u>かさ</u> 。 | 9. <u>悪口</u> に <u>フンガイ</u> する。 |
| 10. <u>失意</u> の <u>友</u> に <u>ナグサ</u> める。 | | |

レベル5 「九級」の書き取り十問。

- | | | |
|---|--|---------------------------------|
| 1. <u>駅</u> の <u>カイサツ</u> 口。 | 2. <u>セツトウ</u> を <u>は</u> たら <u>い</u> て <u>捕</u> まる。 | 3. <u>キョウ</u> ハクの <u>電</u> 話。 |
| 4. <u>人</u> の <u>やり方</u> を <u>モホウ</u> する。 | 5. <u>黒い</u> モ <u>フク</u> を <u>着</u> る。 | 6. <u>タイダ</u> な <u>生</u> 活。 |
| 7. <u>牛</u> の <u>乳</u> を <u>シボ</u> る。 | 8. <u>秘密</u> が <u>モ</u> れる。 | 9. <u>委員長</u> に <u>スイセン</u> する。 |
| 10. <u>状況</u> を <u>ハク</u> する。 | | |

アンケート

1. 目標としたレベルの数字を1～5で記入して下さい。
2. 目標としたレベルに対する努力の自己評価をA～Eで記入して下さい。
3. このテストのできに対する自己評価をA～Eで記入して下さい。
4. 感想等があれば記入して下さい。

(以上)

表1 「漢字コンクール」問題

1-3 今回の実施について

ところが中三にもなると、履習済の漢字が多くなるため、生徒の能力差も歴然としてくる。「九級」までの読み書きを全生徒に要求するのは無理である。そこで出題方法を工夫して、問題に次の五つの区分を設けた。

<レベル1>

「一級」から「六級」まで（小学校配当）の書き。40点。

<レベル2>

「七級」から「九級」まで（中学校で扱う常用漢字）の読み。30点。

<レベル3>

「七級」の書き。10点。

<レベル4>

「八級」の書き。10点。

<レベル5>

「九級」の書き。10点。

1問1点で100問出題。（実際の問題は表-1参照）
生徒には、どのレベルまでできるようにするかという目標を各自で設定させた。

「漢字コンクール」実施までの経過は次の通りである。三学期の2月2日の実力テスト（第2回）では、<レベル1>と同じ範囲を全員共通の出題範囲とし、20点分出題した。そして、2月中旬に今回の実施要項を発表し、どのレベル設定が自分にとってよいか考えさせた（注3）。3月初旬の学年末テストを挟んで、1ヶ月後の3月19日（中学修了式の前日）に、「漢字コンクール」を実施した。

漢字が苦手な生徒は、もう一度実力テストの範囲でやりたい生徒には<レベル1>を勧めた。また、<レベル2>は平均的な中学卒業の目標レベルであり、<レベル2>がだいたいできればよいことを全生徒に伝えた。しかし、できれば<レベル3>以上を目指して欲しいとも述べた。<レベル2>設定の根拠は、中学校学習指導要領の第3学年の指導事項による（注4）。

その結果、<レベル1>を目標にした生徒は10名、<レベル2>は34名、<レベル3>は25名、<レベル4>は4名、<レベル5>は4名であった（注5）。

このレベル設定については、生徒には好評であったようだ。特に、苦手な生徒、新出漢字は全て書けなければならないという強迫観念を持つ生徒には、とりあえず<レベル2>ぐらいがだいたいできていればいいのだよ、という指示が随分安心感をもたらしたようである。また<レベル2>選択者の多さは、

漢字の読みへの抵抗の少なさが感じられる。レベル別目標設定は概ね良い結果が得られたと思われるが、それに伴う諸問題や、個人別の結果分析・考察は、別稿に譲ることとしたい。

さて、最後になったが、今回の出題の方針としては次の2つを立てた（生徒には非公表）。一つは、簡単・単純なものは出題しないこと、即ち級別にバランス良く出題せず、誤り易いものを主に出题することである。もう一つは、常用漢字であっても、あまり使われず、用法の限定されたものは出題しないということである。いずれも、中学修了時点での実施ということを考慮し、何が適正かを考えた上でのものである。

2. 結果と分析

	得点	正解率
レベル1	2178	73.6%
レベル2	1484	66.8%
レベル3	360	48.6%
レベル4	207	28.0%
レベル5	82	11.1%
全体	4311	58.3%

表-2 レベル別正解率

得点	人数
90~	1
80~89	5
70~79	9
60~69	18
50~59	22
40~49	11
30~39	8

表-3 得点分布

全体の結果は上の表-2、3の通りである。生徒個人別の最高点は90点、最低点は31点であった。

さて本稿はこれから、合計100問の各設問別の集計、及び分析を行い、これから窺える諸問題について考察していきたい。まず、読みの問題を扱った<レベル2>について検討することとする。

2-1 「読み」について

表4は「読み」の30問を設問別に集計したものである。A欄「順位」とは、正解率の高さによるもので、表4はこの順位に従って、設問毎に上から順に並べてある。以下、設問毎に横に見ていくと、B欄は問題番号、C欄は設問の漢字表記、Dが生徒のう

A 順位	B 問題 番号	C 問題	D 正解数	E 正解率	F 無解答数/誤答数	G 無解 答率
1	10	貢献	74	100.0%	0/0	0%
2	8	妨げる	73	98.6%	0/1	0
2	15	容赦	73	98.6%	0/1	0
4	11	交渉	72	97.3%	0/2	0
4	26	健やか	72	97.3%	0/2	0
6	12	穏やか	71	95.9%	0/3	0
6	14	誘拐	71	95.9%	0/3	0
8	18	普遍	69	93.2%	0/5	0
9	2	施す	67	90.5%	1/7	14.3
10	1	戒める	66	89.2%	3/8	37.5
10	27	利く	66	89.2%	3/8	37.5
12	22	擦る	64	86.5%	1/10	10.0
13	5	滑らか	60	81.1%	2/14	14.3
13	21	威嚇	60	81.1%	5/14	35.7
15	16	据える	59	79.7%	2/15	13.3
16	6	瞬く	58	78.4%	2/16	12.5
17	28	干る	54	73.0%	1/20	5.0
18	30	殉職	50	67.6%	6/24	25.0
19	29	併せて	49	66.2%	17/25	68.0
20	3	柔和	34	45.9%	5/40	12.5
20	7	官吏	34	45.9%	0/40	0
22	25	不朽	32	43.2%	6/42	14.3
23	9	稚拙	27	36.5%	11/47	23.4
24	17	落下傘	25	33.8%	9/49	18.4
25	13	排斥	21	28.4%	6/53	11.3
26	19	謁見	19	25.7%	19/55	34.5
27	4	代替	18	24.3%	17/56	30.1
27	24	培う	18	24.3%	13/56	23.2
29	20	罷免	16	21.6%	15/58	25.9
30	23	濫伐	12	16.2%	7/62	11.3

表4 「読み」問題 設問別集計

ち何人が正解したかという数、Eが正解率である。受験者数は74名なので、Dの数字を74で割って出したものがEとなる。FとGは、生徒の解答の中でも無解答（答えが書かれていないもの）であったものに着目したものである。F欄の分母は誤答数（74からDの数を引いたもの）、分子はそのうち無解答であったものの数、G欄はF欄の計算で出てきた、誤答の中に無解答がどれだけあったかを表す数字であり、この数字が大きければ設問に対して何も書けなかった誤答が多いことを示し、小さければ、設問に対して誤った反応を示した誤答が多いことを示す。

2-1-1 正解率から考えられること

さて、表4で明らかに分かることは、19位と20位

の間にある正解率（E欄）の大きな差である。ここで20ポイント以上の段差があり、19位以上のものではだいたい生徒が読め、20位以下は半数以上の生徒が読めずできの悪い設問と判断することができる。この上位グループと下位グループが生じた理由は何であろうか。

漢字の字形の難しさ、ということではない。それは、「容赦」「誘拐」「威嚇」「殉職」「瞬く」「滑らか」などが上位にあり、「柔和」「代替」「培う」などが下位にあるということから言える。むしろ、生徒の語彙にあるものは漢字の字形の難しさにかかわらず読めるということが言えるだろう。

「容赦」「誘拐」は普段よく耳にし、生徒もよく意味内容を理解し、自分で使用することのできる語で

ある。慣れ親しんだ語である。このような語は、いざ漢字表記を見せられた場合も、あまり抵抗なく受け容れられることが予想される。読みと漢字表記がすんなり結び付くのである(但し、書き取りとなると正解率はかなり下がるであろう)。「威嚇」にしても「イカク」という語には生徒は慣れていそうである。「ジュンショク」もドラマなどでよく出てくる。19位以上のものは多くの生徒の語彙に存在するものである。

それに対して、20位以下のものは普段あまり耳にせず、日常会話でも使われにくい語である。つまり、「柔和」→「温和」、「官吏」→「役人」、「不朽」→「不滅」、「稚拙」→「下手」、「排斥」→「排除」のように別の表現の方がよく用いられる語や、「罷免」のようにある決まった用法でしか使われない語が多い。「落下傘」は、今の中学生にはもう親しみのない語になっている(「パラシュート」と言えば分かるであろう)。こういうなじみのない語は、漢字表記と読みが結び付かない。20位以下は、生徒の語彙の範疇に入りにくいものである。

以上から、生徒の語彙と読みの問題の正解率は密接なかかわりがあることが知られる(注6)。

2-1-2 無解答率から考えられること

次に無解答率で際立つものを見てみると、20位「官吏」の0%が目につく。38名が「カンシ」としていた(あとの2名は「カンイ」と「カンエキ」)。何となく誤ったよみでも読めてしまう、というものであり、注意を要する。誤った読みのまま記憶され、なかなか修正がきかないからである。正解率が悪い割に無解答率の低いものはこの傾向を持つ。30位「濫伐」は誤答62名中37名が「カンバツ」、20位「柔和」は誤答40名中28名が「ジュウワ」と答えているのも同例である。

2-2 「書き」について

表5は<レベル1><レベル3><レベル4><レベル5>の書き取り70問についての設問別集計表である。順位数字の左側に○印が付してあるのは、その設問が訓読みの書き取り問題であることを示す。A欄からG欄については、表4と同様である。F欄の無解答数は、空欄であるもの及び熟語で一つ以上の漢字が全く書かれていない解答の合計数である。

図1は表5をグラフで表したものである。縦軸を正解率、横軸を無解答率として各設問の位置を示した。

2-2-1 正解率から考えられること

出来の悪い設問を仮に正解率60%未満として分析してみると、次のような漢字が書けないという特徴が浮かぶ。

①字形の難しいもの

<レベル4><レベル5>の設問群から明らかである。

②似た字形の漢字があるもの

「歓迎」における「歓・観・勤」、「孤独」の「孤・狐」、「便宜」における「宜・宣」など。

③生徒の語彙にないもの

当然の如く書けない。但しここで注意しておきたいのは、読みの問題と違って、当然生徒の語彙にあると思われる日常のことばでも、ほとんど書けないものがあるということである(例えば「軟弱」「漏れる」「慰める」)。語彙にあっても、かなり意識的に練習しないと書けるまでに至らないものがあるということである。

④同音異字・同訓異字があるもの

簡単な漢字の正解率を下げる大きな要因である。詳しくは次節で扱う。

⑤訓読みのもの

訓読みの漢字は意味と結び付くため音読みの漢字より書き易いと錯覚しがちである。しかし事実はそのようではない。正解率60%で切ってみると、音読みでは45問中60%以上のものが23問、60%未満のものが22問、訓読みでは25問中60%以上のものが12問、60%未満のものが13問である。更に訓読みの中でも「谷底」(正解率94.6%)、「鼻」(正解率90.5%)、「卵」(同89.2%)、「裏」(同75.7%)を除けば、用言の訓読みの漢字の出来が悪いと考えられる。

これは、そもそもやまとことばに漢字をあてることが不必要なことである、と言えそうであるが、事実、生徒たちは用言の訓読みの漢字を文章の中で平仮名書きすることにあまり抵抗はない。少し自信がなければすぐ平仮名書きにする。また、「済ませる」「謝る」などは「すませる」「あやまる」と書いた方が楽であり、この平仮名表記が読み手に誤解を与えることはまずない。逆に、熟語や単純な名詞の訓読みの漢字を文章中で平仮名表記することは抵抗がある。大人も同様であろう。用言の訓読みの漢字が書けないのは、その漢字を書く必要度の低さに由来していると考えられる。

正解率を下げる要因としては以上の五つが考えられるが、これらが複合すると更に正解率は下がるものと思われる。レベル3-7「歓迎」は②と④が複合したもの、レベル5-7「搾る」は生徒の語彙にあるのに①と④と⑤が複合して正解率を1.4%まで押し下げたものと思われる。

<レベル1>

A 順位	B 問題 番号	C 問題	D 正解数	E 正解率	F 無解答数/誤答数	G 無解 答率
1	1 2	第三者	71	95.9%	0 / 3	0 %
1	1 6	信用	71	95.9%	1 / 3	33.3
3	4	谷底	70	94.6%	2 / 4	50.0
3	2 0	災害	70	94.6%	1 / 4	25.0
5	1 7	胃腸	69	93.2%	1 / 5	20.0
5	1 8	生徒	69	93.2%	0 / 5	0
7	3	広告	67	90.5%	3 / 7	42.9
7	1 1	苦難	67	90.5%	0 / 7	0
7	1 4	鼻	67	90.5%	0 / 7	0
7	3 0	態度	67	90.5%	2 / 7	28.6
11	3 4	卵	66	89.2%	0 / 8	0
12	2 9	貸し	65	87.8%	0 / 9	0
12	4 0	地層	65	87.8%	3 / 9	33.3
14	1 5	包み	63	85.1%	8 / 11	72.7
15	1 3	配達	62	83.8%	3 / 12	25.0
16	3 6	敬う	61	82.4%	8 / 13	61.5
17	6	外科	59	79.7%	5 / 15	33.3
18	2 1	燃焼	58	78.4%	7 / 16	43.8
18	3 8	分割	58	78.4%	6 / 16	37.5
20	7	組織	57	77.0%	2 / 17	11.8
21	1 0	追究	56	75.7%	3 / 18	16.7
21	3 9	裏	56	75.7%	2 / 18	11.1
23	1 9	投票	55	74.3%	3 / 19	15.8
24	2	耕す	54	73.0%	12 / 20	60.0
25	2 5	除く	53	71.6%	10 / 21	47.6
25	3 1	成績	53	71.6%	0 / 21	0
27	2 3	関心	51	68.9%	0 / 23	0
28	1	方角	50	67.6%	14 / 24	58.3
29	8	悲鳴	49	66.2%	12 / 25	48.0
30	5	絶体絶命	44	59.5%	1 / 30	3.3
30	2 6	測る	44	59.5%	1 / 30	3.3
32	2 4	任せる	41	55.4%	28 / 33	84.8
32	3 3	批判	41	55.4%	8 / 33	24.2
34	3 2	謝る	37	50.0%	28 / 37	75.7
35	3 5	済ませる	36	48.6%	27 / 38	71.1
36	2 7	険悪	35	47.3%	22 / 39	56.4
36	2 8	引率	35	47.3%	10 / 39	25.6
36	3 7	補充	35	47.3%	18 / 39	50.0
39	9	反らす	28	37.8%	16 / 46	34.8
40	2 2	対照的	23	31.1%	1 / 51	2.0

表5 「書き」問題 設問別集計

2-2-2 無解答率から考えられること

次に図1の横軸に表される無解答率を使って考える。無解答とは、設問部分にあたる漢字が、たとえ

当て推量であっても思い浮かばないものと考えてよいだろう。そうすると、無解答率の高いものとはどういふものであろうか。一つは、図1の実線の枠の

<レベル3>

順位	問題 番号	問題	正解数	正解率	無解答数/誤答数	無解 答率	
○	1	1	忙しい	57	77.0%	15/17	88.2%
○	2	7	悩む	49	66.2%	19/25	76.0
○	3	6	眠る	47	63.5%	13/27	48.1
	4	9	象徴	46	62.2%	18/28	64.3
○	5	2	含む	40	54.1%	28/34	82.4
	6	4	孤独	31	41.9%	11/43	25.6
	7	3	歓迎	26	35.1%	17/48	35.4
	8	5	採掘	24	32.4%	28/50	56.0
○	9	10	潜む	21	28.4%	37/53	69.8
	10	8	余暇	19	25.7%	26/55	47.3

<レベル4>

	1	3	抵抗	52	70.3%	9/22	40.9
	2	1	妥協	28	37.8%	34/46	73.9
○	3	10	慰める	21	28.4%	39/53	73.6
	4	2	便宜	20	27.0%	33/54	61.1
○	5	4	侵す	19	25.7%	13/55	23.6
○	5	8	曇み	19	25.7%	43/55	78.2
	7	6	軟弱	18	24.3%	34/56	60.7
	8	7	循環	15	20.3%	37/59	62.7
○	9	5	陥る	11	14.9%	59/63	93.7
	10	9	憤慨	4	5.4%	46/70	65.7

<レベル5>

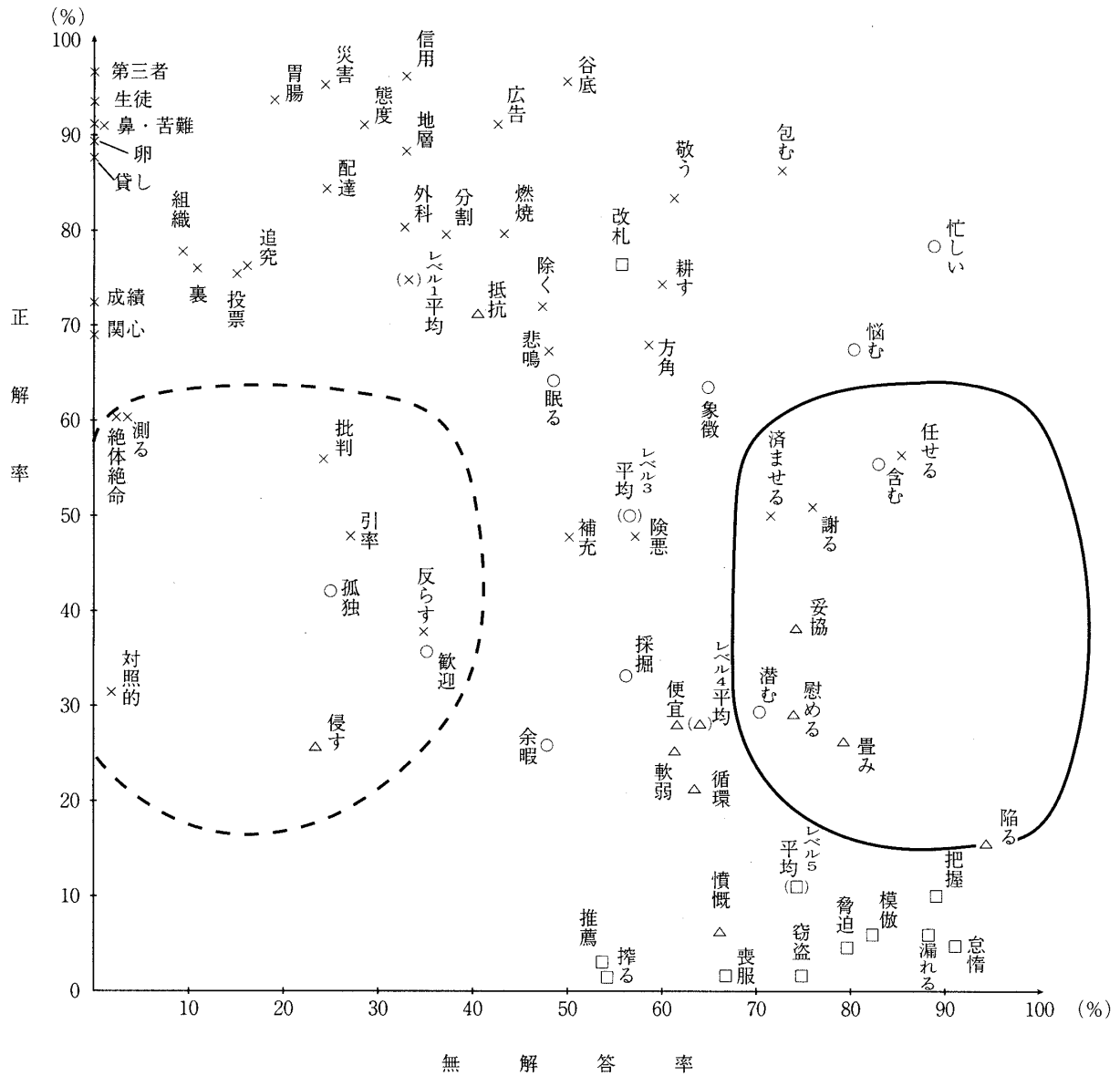
	1	1	改札	56	75.7%	10/18	55.6
	2	10	把握	7	9.5%	59/67	88.1
	3	4	模倣	4	5.4%	57/70	81.4
○	3	8	漏れる	4	5.4%	61/70	87.1
	5	3	脅迫	3	4.1%	56/71	78.9
	5	6	怠惰	3	4.1%	64/71	90.1
	7	9	推薦	2	2.7%	38/72	52.8
	8	2	窃盗	1	1.4%	54/73	74.0
	8	5	喪服	1	1.4%	48/73	65.8
○	8	7	搾る	1	1.4%	39/73	53.4

下に位置するもので、字形の難しい漢字を挙げることができる。もう一つは実線枠内のグループの漢字である。

実線枠内の漢字群の特徴を考えるために、同じく図1の点線枠の漢字と比較してみる。これらは、正解率は変わらないが、無解答率が大きく異なり、前者が高く、後者が低くなっている。それぞれに属する漢字をみると、実線枠内の漢字は、ほぼ「同訓異字のない用言の訓読み」であり、点線枠内の漢字は、「同訓・同音異字を持つ」ものであることが分かる。

前者から見てみる。レベル1-22「対照的」は74

名中1人しか無解答がないのに正解したのはたった23名である。「照」を「象・称」にしている。枠内の他の問いも生徒の誤り方が容易に想像がつくものである。レベル1-9「反らす」は、音から「沿」、意味から「背」の当て字が多い。漢字部分が1音節なので、漢字を当て易いのである。レベル1-33「批判」は「ヒ」と「ハン」に分けて、勝手に音の同じ漢字を当てる誤答が多い。要するに、このグループは、日常的な語であるにもかかわらず、同訓同音の別の漢字を書いてしまうために誤答となるものである。換言すれば、確かに分からなくても何らかの漢字を



レベル別平均	正解率	無解答率
レベル1 ×	73.6%	34.3%
レベル3 ○	48.6%	55.8%
レベル4 △	28.0%	65.1%
レベル5 □	11.1%	73.9%

図1 書き取り問題（70問）についての正解率・無解答率 分布図

あてることができてしまうために、正しい漢字がなかなか習得できない集団と言える。同訓・同音異字のあるものは無解答率が下がるために、間違っている自覚を持てずに過ぎてしまう危険が大きい漢字ということである。字形の難しい〈レベル5〉の集団の中でも、レベル5-9「推薦」、5-7「搾る」が図1で左寄りに位置しているのは、「推選」「絞る」という当て字ができてしまうためである。これらも放置しておく、生徒が誤ったまま覚え込む可能性が生じる。

実線の枠内は「妥協」を除いて全て用言の訓読みの漢字である。そして、同訓異字を持たず、当て字がしにくいために無解答率が上がったものと思われる。分からないと書けないという漢字は、前述の字形の難しいものを除けば、このような訓読みの漢字なのである。そしてその多くは生徒の語彙にあるため、思い出せそうで思い出せないと生徒を試験中に大いに苦悩させると思われる。不正解においても、解答してあるものと無解答のものとは、意味が違うと考えられるのである。

3. 指導への提言

3-1 「読み」の結果より

読みの問題の正解率は生徒の語彙と密接な関わりのあると2-1で述べた。よって、生徒の語彙を増やしていけば、読める漢字もふえていくと考えられる。あらゆる方策を講じて生徒の語彙量を増やしていくことがポイントである。

語彙量を増やすには多読が有効であるのは言うまでもない。様々な文を、細部にあまりこだわらずどんどん読ませることである。そして、次は「多作文」である。どんな稚拙な文でもいいから、どんどん自由に書かせること。これらの文字の「読む」「書く」をどれだけさせるかが語彙獲得に大きくかかわる。

また、それと同時に、音声にかかわる「聞く」「話す」も忘れてはならない。幼児期の語彙の獲得は無論音声言語からであるが、成長するとともに音声言語の重要性が忘れられていく。中学生の段階、或いはそれ以上の段階においても、音声言語からの語彙の獲得はかなりなされるのではないか。身近な話しことばを見つめ直し、大切にしよう、ということが近年あちこちから言われるが、このことは、漢字の習得にも繋がってくるのである。

教師の説明や授業中の言葉遣いも、生徒の語彙獲得に貢献するようなものでありたい。何もかもやさしく言えば良いというものでもない。何でも生徒に合わせた平易な表現に言い換えてしまうのは慎むべきではなかろうか。時には難しい表現を用いても良

い。古語・漢語を含めて、バラエティーに富んだ言葉を生徒に聞かせることを、特に国語教師は忘れてはならない。

生徒の日常の会話についても、ごく少数の仲間うちだけに通じる会話に止まることなく、外に開かれた、内容の豊かな話しことばに目を向けさせたい。

漢字指導と言うと、ひたすら漢字の読み書き練習と考えがちであるが、言語指導の一つが漢字指導であり、色々な言語事項の総合的な発達という視座に立つことが必要である。

次に、中学生までに履習させる漢字を減らしたいという現場の教師の意見について述べる。学校が週休二日制になることもあって、負担(生徒ばかりでなく教師も)を軽減したいということである。特に、多画数のもの、抽象度・専門性が高いものは授業で扱わないでおきたいという声が多い(注7)。しかし、筆者の考えは履習漢字の減少という声には与しない。

2-1の「読み」の結果でも述べたが、生徒は字形が難しくても読める。「嚇」ですら8割以上の生徒が読めるのである(注8)。字形の難しいものを正確に書くことを、多くの生徒に要求してはいけないだろう。全ての生徒が、履習した漢字をすぐ書けるようになるはずはない。しかし生徒は、身近で見慣れた漢字は読めてしまう。履習させる漢字を減らす必要はない。特に「読み書き別習」の方式をとるなら、なおさらのことである。

3-2 「書き」の結果より

書きの問題の正解率は生徒の語彙とは直結しないことを2-2で述べた。語彙になれば書けないが、語彙にあっても様々な要因があって書けない。では、書けるようにするためにはどうすればよいか。

字形の難しいものは、その漢字を構成している要素に分けて、書き順も含めて説明してやるしかないであろう。字形の似た漢字を持つものも同様である。漢字をいくつかの部分に分け、それがどう組み合わせられているか、或いは、どの部分が同じでどの部分が違うかを一度は納得させ、練習させなければならない。この際、漢字の成り立ちや部首の表す意味を教えると有効なことがある。しかし、これらは万能ではない。新字体の全ての漢字がこれで説明できる訳でなく、また、成り立ちを理解するだけで苦勞する漢字もあるからだ。あまり深入りせず、成り立ちや部首の説明が有効と思われるものに限定した方がよい。

同音・同訓異字を持つ漢字が習得しづらい理由は、2-2-2で述べた。無解答率の低いことが示す危険(とりあえず書いてしまうためになかなか修正で

きないこと)を教師の側が認識しておくことも有効だろう。

また、訓読み漢字が音読み漢字より正解率の悪い現象を2-2-1で述べた。教師は、生徒が訓読み漢字が書けないということを、明確に意識すべきである。訓読み漢字が思い出せない場合の対処法として、その訓読み漢字に置き換えられる熟語を想起してみるという方法(注9)が従前から伝えられているが、合理的と言える。また、訓読み漢字の無解答率の高さから考えると、問題演習をして生徒に考えさせる作業や、演習後の答え合わせの際に重点的に教師が解説してやるのが、訓読み漢字の意識化・習得に有効ではないかと考えられる。

これら同音同訓異字を持つものや訓読みの漢字の習得には、漢字は表音文字でありかつ表意文字である、という性格のうち、表意性に十分生徒の注意を向けることが第一歩である。漢字そのものに意味があるということ、熟語の用例や訓読みの検討、漢和辞典の利用などで気付かせ、記憶させたい。

しかし、ここで注意をしておきたいのは、いくら合理的な説明をし、いくら用例を使った練習をさせても、それだけでは書けるようにはならないということである。特に、同音同訓異字を持つものや、似た字形の漢字を持つものはなかなか書けるようにならない。今回の正解率の低さがそれを物語っている。筆者は「対象・対照・対称」「歓迎・観光・勧誘」について、かなり時間をかけて説明し練習させたが、正解率は大変悪い。試験となるとその場は用例ごと記憶し、書けるようになるが、その場限りなのである。つまり、これは、範囲の狭い定期試験であれば所謂試験勉強も可能であるが、今回のような実力テスト的なものでは、生徒がその漢字を自在に操れるレベルまでいかないと書き取れないということである。練習の際、ただワークシートを完成する、或いは問題集で問題を解くという行為のみでは効果は薄く、むしろ、その漢字を使った短文作成まで時間をかけて行わないと効果は挙がらないだろう。

以上、漢字の「書き」の習得には、生徒の語彙として獲得されることに加え、様々な問題があること、それに対しての指導法として考えられることを述べた。

3-3 国語教育の中の言語教育の位置付け

このような漢字教育を始めとする言語教育を十分行うには多くの時間が必要である。しかし、現在の国語教育の中で言語教育の占める割合は高くない。また完全週休二日制によって時間的な制約が厳しくなることを考えると、将来十分な言語教育を行う環

境が保障されるとはいえない。

そこでこれからの言語教育に対する考え方は二つ出てくる。一つは、生徒の負担を減らし、ゆとりを与えたいという発想から、学年別配当漢字の削減など、指導内容を今まで以上に精選するという考え方であり、もう一つは、これ以上の言語事項の軽視が重大な問題を招くことを憂慮する考えから、何らかの抜本的な改革により、現行より充実した言語教育を目指す考え方である。

言うまでもなく、ことばの学習は全ての学習の基礎基本である。基礎基本がなくては、その上に何ものも積み上げることはできない。基本的な知識・技能がなくては、たとえ問題意識の萌芽があっても、問題を思考し、解決する力は育たない。「総合的な学習」もできるはずがない。国語教育の中での言語教育の軽視は、国語教育をはじめとして、教育の全てがうまく機能しなくなる状態をもたらすだろう。従って、これ以上、言語指導にあてる時間の削減は避けなければならないという立場に筆者は立つ。

言語教育重視の方策を二つあげる。一つは、国語科の中で、文学教育と切り離し、言語教育の部分を日本語を教える教科として独立させることである。もう一つは、中学校の段階、或いは中学校の前半までは、文章(韻文を含む)の読解にあてる時間の割合を大幅に低くし、言語事項の基礎基本を徹底的に訓練する方法である。本格的な文学教育や難しい評論文の読解練習は、中学後半から高校以降へ回すのである。

漢字教育の改革も必要である。現在の国語教師が生徒に要求しがちな厳密で高度な書き取りのレベルが、少なくとも義務教育段階で全員共通して必要であろうか。「読み」ができれば十分な漢字もあるのではないか。もっと「読み」に重点を移してもよいと思う。学年別漢字配当表も「読み」と「書き」に分けた方がよいかもしれない。

また、最近「総合的な学習の時間」が設置されているが、これは国語科と関わりが深い。中学の教科書の中でも、これを意識した編集をし、総合単元を設けているものもある(注10)。この科目と国語教育との関連がこれからの重大な関心事となっていくであろうが、その関連性や国語科の独自性を考えていくためにも、国語教育の中の言語教育を再考し、重点を置いていかななくてはならない。

4. おわりに

以上「漢字コンクール」の方法と結果の分析、それに基づいた漢字教育、国語教育への私見を述べてきた。「読み」の問題と語彙との直接的な関わり、書

き取りのできない要因 — 特に訓読み漢字や同訓同音異字を持つ漢字について — や無解答の問題など、実際に分析してみて意外な事実が現れた。本文では触れなかったが、正解率の高い設問群を形成するものに驚くこともあった。このことは、自分がいかに勘に頼って経験主義的な教育をしていたかを示すだろう。科学的な認識に基づいた言語教育を目指し、それに有効な基礎的研究を行っていくことがこれからの国語教育に不可欠であると思われる。

注

- (1) 本校の慣例で二人の国語の教官が一つのクラスを担当している。時間数や担当教材を折半するので、三年間持ち上がったと言っても、筆者が全ての内容を担当した訳ではない。
- (2) 但し、練習問題には級に関係なく様々な漢字が使われている。このテキストが使いづらい一因である。
- (3) 申告させたのは実施三日前である。
- (4) 指導要領の第3学年の読み書きについての指導事項は次の通り。
「読み」…第2学年までに学習した常用漢字の読みに慣れ、更にその他の常用漢字の大体も読むこと。
「書き」…学年別漢字配当表に示されている漢字について使い慣れ、漢字を文章の中で適切に使うようにすること。
- (5) 長欠の生徒と当日欠席の生徒の2名は未提出。
- (6) 但し、生徒の語彙になくてもその漢字の形状から音が容易に推定される漢字がある。例えば、徊(カイ)、稿(コウ)など。
- (7) 第94回全国大学国語教育学会(98年8月3日)での矢部玲子氏の口頭発表。全国131名の中学国語科教師の意識調査であるが、負担軽減を求め声が示されている。
- (8) 前述の調査によると「嚇」を中学段階で教える必要なしと答えた数は約22%に上る。
- (9) 例えば、「うやま(う)」の漢字が分からない場合、設問と同じ意味の熟語「尊敬」を思い浮かべれば、「敬う」と書けるということ。
- (10) 学校図書版「中学校国語」1～3